第１章　　伊 達 市 の 概 況

１．伊達市の成り立ち

伊達市は少子高齢社会の到来、逼迫する地方財政といった今日の課題に立ち向かい、地方分権による自主自立のまちづくりの基礎固めを行うために、平成 18(2006)年３月に大滝区(旧大滝村)と合併をし、新伊達市として新たなスタートをしております。

また、このような時代にあって合併後最初の総合計画である第六次伊達市総合計画(平成 21(2009)年度～平成 30(2019)年度)では、厳しい現状を認識しながら夢を持って臨むことが大事なことと考え、貴重な財産である恵まれた自然環境と、先人が苦難の中、夢を持って開拓した精神、市民が互いに支えあう心を大切にしたいとの思いから、将来像を「自然を育み 未来に向かって挑戦する 人にやさしいまち」と定めて「まちづくり」を展開しています。

【伊達地域(旧伊達市)の成り立ち】

伊達地域の開拓は、明治３(1870)年、仙台藩一門亘理領主伊達邦成(だてくにしげ)とその家臣たちの自費による集団移住という他に類を見ない独特の形態で行われており、北海道においてはとりわけ古い歴史と伝統文化を有しています。

明治 33(1900)年の一級町村制施行による有珠郡東紋鼈村(ひがしもんべつむら)、西紋鼈村(にしもんべつむら)、長流村(おさるむら)、有珠村(うすむら)、稀府村(まれっぷむら)、黄金藥村(おこんしべむら)の合併による伊達村の誕生、大正 14(1924)年の町制施行、昭和 47(1972)年の道内 33 番目となる市制施行を経ております。

北海道の中心である札幌市からはＪＲや高速道路の利用により約 100 分の距離に位置し、海と山と湖に囲まれた田園風景の広がる街は、豊かな自然環境と四季を通じて温暖なことから「北の湘南」と称されるなど、快適な居住地として知られています。

【大滝区(旧大滝村)の成り立ち】

大滝区の開拓は明治 28(1895) 年に鹿児島県人の橋口文蔵が優徳および北湯沢に農場を拓いたのが開拓の始まりと伝えられ、一帯は壮瞥村の管轄として入植者を増やしていきました。

大正４(1915) 年には壮瞥村から分村し徳舜瞥村となり、昭和 25(1950) 年には大滝村と改称、森林産業、農業、鉱業の隆盛とともに歩み続けてきましたが、昭和 30 年代後半以降は、零細経営農家の離農、徳舜瞥鉱山の閉山等により急激な過疎現象に見舞われました。

その後、「福祉村構想」や「観光施策の推進」などあらたな地域づくりを展開した結果、就業機会の拡大などにより定住人口もある程度回復し、急激な過疎化の進行からは脱却しましたが、若年層の流出、高齢者比率の増加など、現在も過疎化の問題は継続しています。

■伊達地域へのアクセス■

○札幌から　車（道央自動車道）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 約１時間 40 分
　　車（中山峠経由：R230・R276・R453）・・・・・・・・ 約２時間 20 分
　　車（美笛峠経由：R453・R276・R453）・・・・・・・・ 約２時間 30 分
　　ＪＲ特急・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 約１時間 50 分

○千歳から　車（道央自動車道）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 約１時間 20 分
　　ＪＲ特急・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 約１時間 20 分

○函館から　車（R5・道央自動車道）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 約２時間 40 分
　　ＪＲ特急・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 約１時間 50 分

【伊達市大滝区】

○札幌から　車（中山峠経由：R230・R276）・・・・・・・・・・・・・・・ 約１時間 50 分
　　車（美笛峠経由：R453・R276）・・・・・・・・・・・・・・・ 約１時間 40 分

○伊達地域から　車（R453）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　約 40 分

２．位置と気象

本市は北海道の中央南西部、道都札幌市と函館市の中間に位置します。伊達地域と大滝区は壮瞥町を挟み、東は登別市・白老町・千歳市、西は喜茂別町・留寿都村・洞爺湖町、南は室蘭市、北は札幌市と隣接しており、合併後の面積は 444.2k ㎡となっています。

噴火湾(内浦湾)に面する伊達地域は、日本海から津軽海峡を通過する対馬暖流の影響を受けるため、四季を通じて温暖であり、農作物も豊富で秋には柿が実るほどです。また初雪も 11 月と遅く、降雪量も少ないことから、積雪による交通障害は極めて稀です。

厳しい冬の期間が長い北海道において、本市はもっとも恵まれた気象条件を有していることから「北の湘南」といわれています。また、夏場は過ごしやすい気候であることから、夏の間だけ避暑のために伊達地域へ訪れる方が増えています。

一方、内陸に位置する大滝区は内陸性の気候となっており、例年、最深積雪が 100cm を上回り、北海道の冬の厳しさが感じられます。

伊達市の気候

	最高気温 (℃)	最低気温 (℃)	平均気温 (℃)	最大風速 (m/s)	平均風速 (m/s)	日照時間 (h/年)	最深積雪 (cm)	降水量 (mm/年)
伊達地域	30.3	-14.3	8.5	東南東 18.0	3.1	1,800.6	―	794.5
大滝区	30.6	-20.4	5.4	東南東 8.6	1.6	1,479.1	103.0	1,427.5

〈気象庁札幌管区室蘭地方気象台 2017 データ〉

３．人口・世帯数

伊達地域と大滝区の人口は、昭和 60(1985)年以降、ほぼ横ばいで推移しており、平成 17(2005)年の国勢調査では 14,989 世帯、37,066 人、世帯人員は 2.47 人であったのが、合併後の平成 22(2010)年の国勢調査では、15,287 世帯、36,278 人、世帯人員 2.37 人となり、世帯数が増加する一方、世帯人員が減少していました。

平成 27(2015)年の国勢調査では、15,054 世帯、34,995 人、世帯人員は 2.32 人となり、世帯数、人口、世帯人員の全てが減少となりました。

人口動態では、周辺市町村からの流入に加え、恵まれた気候風土を反映して道内外各地から移住する人が多い一方、若年層の都市部への人口流出が続いています。

年齢構成をみると年少人口(0～15 歳)は、平成 7 (1995)年では 14.9%、平成 12(2000)年では 12.9%、平成 17(2005)年では 12.5%、平成 22(2010)年では 11.8%、平成 27 (2015)年では 11.3%と、出生率の低下により暫時低下してきています。また老年人口(65 歳以上)は、平成 7 (1995)年では 19.2%、平成 12(2000)年では 23.5%、平成 17(2005)年では 27.0%、平成 22(2010)年では 30.4%、平成 27(2015)年では 34.6%と増加してきており、全道平均の 29.1%、全国平均の 26.6%を上回っており、高齢化の動きが顕著となっています。また、国立社会保障・人口問題研究所が発表している将来人口推計では、平成 32(2020)年に総人口は 33,520 人に減少し、老年人口の割合を 38.0%とする高い推計となっています。

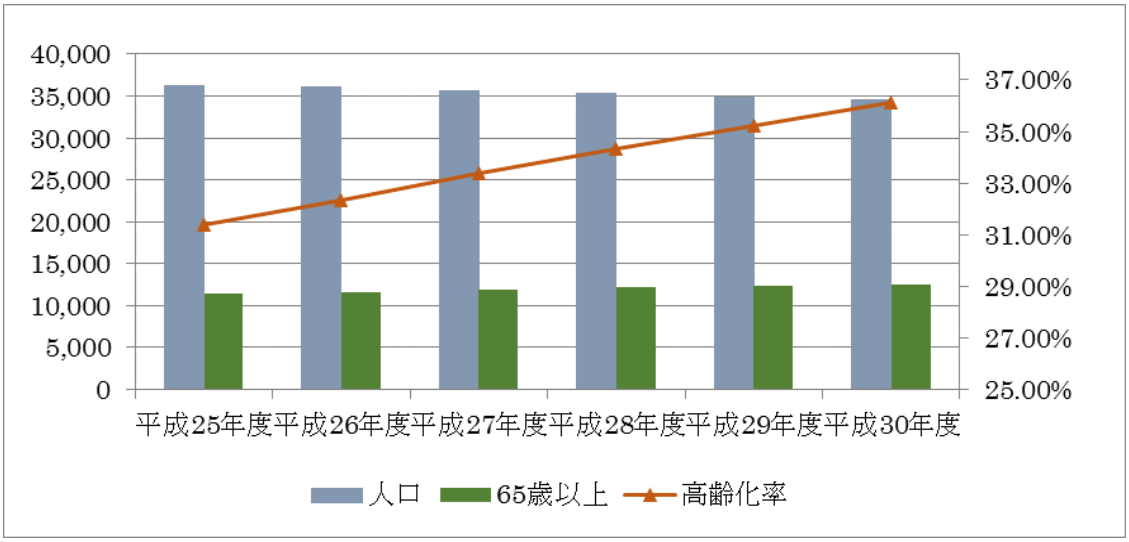
5 歳階級別人口　　（単位：人、%）

年齢区分	平成 30(2018)年 (H30.4.1 住基台帳)	平成 27(2015)年 (国勢調査)	増減	構成比 平成 30 年	構成比 平成 27 年
0～4 歳	1,036	1,125	△89	3.00%	3.21%
5～9 歳	1,246	1,359	△113	3.60%	3.88%
10～14 歳	1,450	1,482	△32	4.20%	4.23%
15～19 歳	1,450	1,445	5	4.20%	4.13%
20～24 歳	1,242	1,082	160	3.60%	3.09%
25～29 歳	1,222	1,202	20	3.53%	3.43%
30～34 歳	1,376	1,521	△145	3.98%	4.35%
35～39 歳	1,761	2,002	△241	5.09%	5.72%
40～44 歳	2,401	2,486	△85	6.94%	7.10%
45～49 歳	2,329	2,108	221	6.73%	6.02%
50～54 歳	2,036	2,041	△5	5.89%	5.83%
55～59 歳	2,146	2,177	△31	6.20%	6.22%
60～64 歳	2,384	2,846	△462	6.90%	8.13%
65 歳以上	12,500	12,107	393	36.14%	34.60%
不詳	0	12	△12	0.0%	0.01%
総数	34,579	34,995	△416	100.0%	100.0%

〈平成 27 年国勢調査　平成 30(2018)年住民基本台帳人口〉

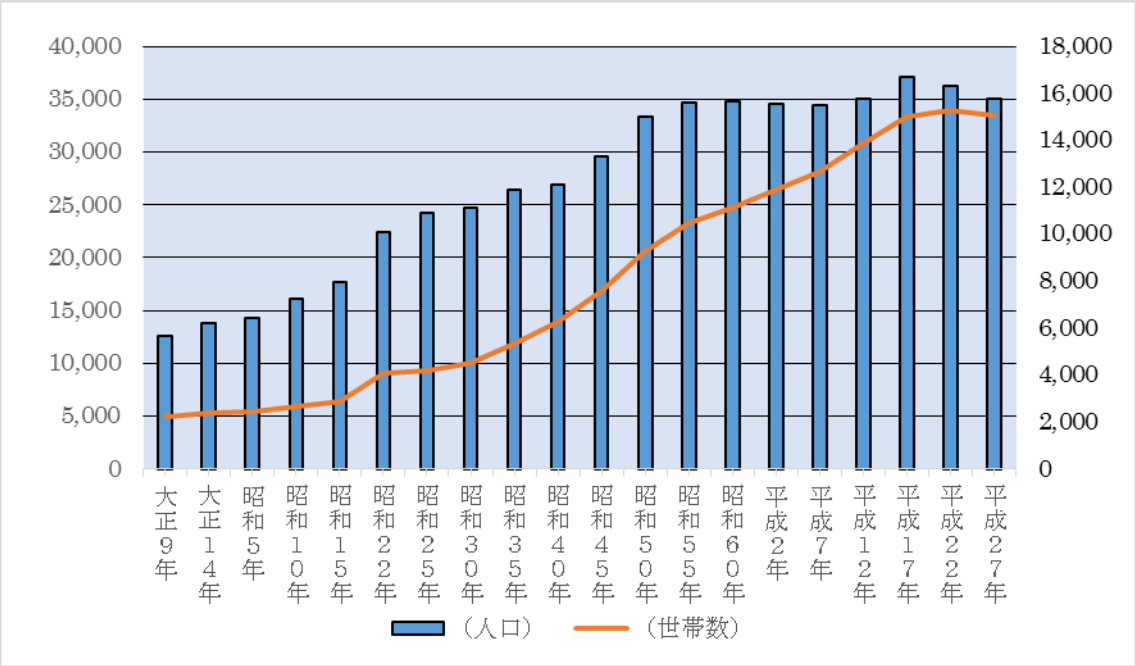
※増減は国勢調査を基準として計算した数値になります。

年度別住民基本台帳人口(各年度４月１日現在)



〈住民基本台帳人口〉

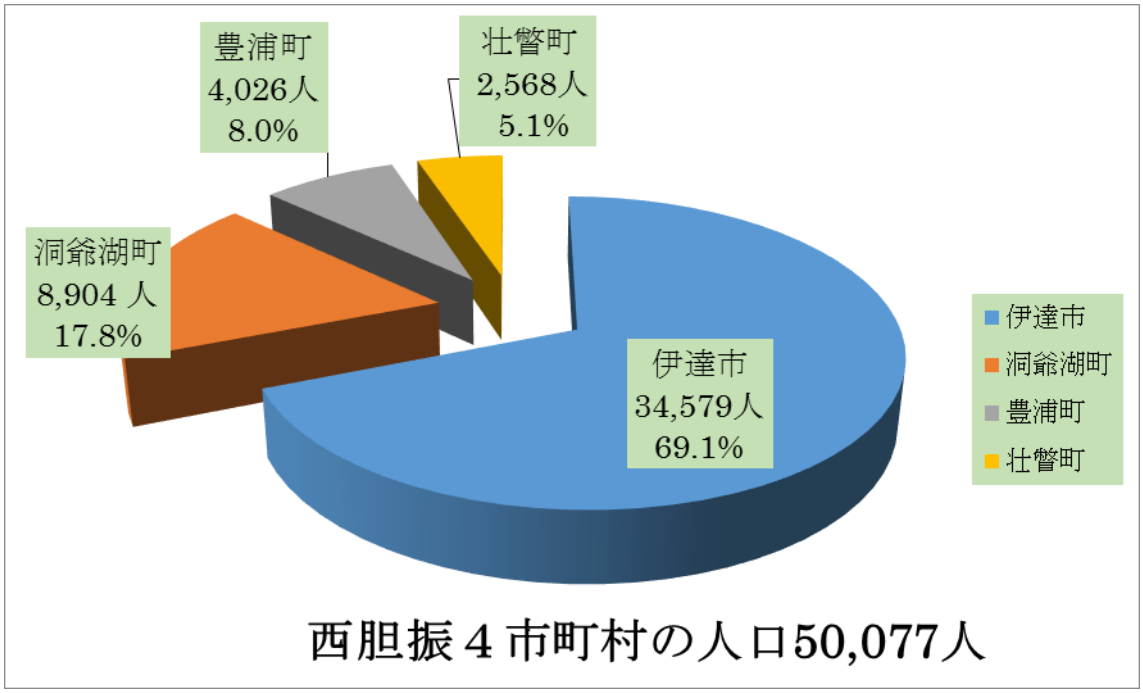
世帯と人口の推移　　（単位：左縦軸/人口　右縦軸/世帯数）



〈国勢調査〉

※平成 17 年より前の数値には旧大滝村を含まず

西胆振４市町別人口（平成 30（2018）年４月１日現在）



〈平成 30（2018）年住民基本台帳人口〉